

長州・藤波の「師匠超え」とアントニオ猪木の涙

- 新日本プロレス -

以前、新日本プロレスで藤波辰巳と長州力の抗争を観戦したが、この藤波・長州がどのようなレスラーであるのかを直接対決ではなく、師匠・アントニオ猪木からカウント 3 を獲るまでの過程を通して比較してみる。

① 1984 年 8 月 2 日 東京・蔵前国技館

アントニオ猪木 VS 長州力

この年の 4 月に蔵前国技館でおこなわれた正規軍 vs 維震軍の大将戦、5 月に行われた IWGP 総当たりリーグ戦の公式戦で長州は猪木にシングル 2 連敗を喫していた。また水面下では長州をはじめとする維震軍の面々の新日本プロレス離脱の計画（新日本プロレス興行→ジャパン・プロレス移籍：全日本プロレスとの業務提携交渉）が進行していた。軍団抗争における頂上決戦で勝てなかった長州が猪木に挑んだラスト・マッチ（実況の古舘伊知郎も「最終決戦」という表現を用いている）で、勝敗にかかわらず長州は新日本プロレスを離脱することが囁かれていた。しかしリング上の長州からは、そうした政治的な背景

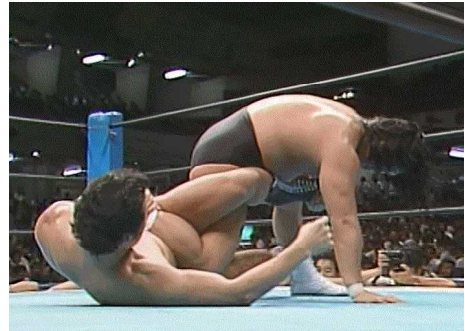
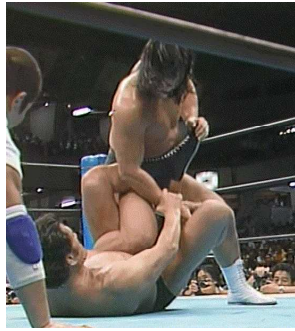


を感じることはなく、長州の身体のハリ・艶共に良好で、戦闘意欲も満々といった佇まいである。ゴングが鳴って観客の声援も高揚するが、猪木・長州共に慎重な間合いの闘ぎ合い、静かなグラウンドの展開が進んで行く。解説の山本小鉄審判部長が肘での小突き合いについて指摘しているが、寝技の際の肘の鋭角的な使い方は猪木が最も得意とするところで、この攻防から長州は猪木の弟子

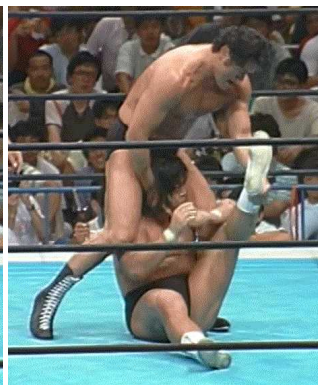
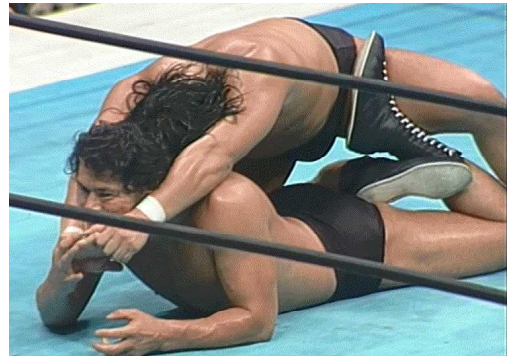
であることがうかがい知れる。グラウンドの攻防が続いていく中、猪木が上になって長州をインデアン・デス・ロックでとらえると、長州は両前腕を顔の前に立てて防御を固める。漫画『キン肉マン』でキン肉マンが見せた「肉のカーテン」という防御法である。猪木が上から殴りつけようとしてもこのガードがあるのでダメージを与えられず、逆に下から長州が張り手を繰り出してはガードのヒット・アンド・アウェイで挑発する。いつも見せるハイ・スパート・レスリングと度々党のパワー殺法は温存、しっ



かり・じっくり・丁寧に攻めている。長州がタックルから猪木の身体を持ち上げてマットに叩き付けるとサソリ固めの態勢に入る。それほどダメージを受けていない猪木は腕をねじ込んで防御、左手で長州の右足首を押さえながら右脚で長州の左大腿部を裁き上体のバ



ランスを崩していく。観客には伝わりにくい、猪木の高度なテクニックである。レフリーにより膠着状態がブレイクされ、仕切り直しの対峙がとなる。ここまで数度、同様な場面となっていることから、猪木・長州共に勢いで攻め込むというよりも超・長期戦を見据えた闘いをしていることがわかる。スナップを効かせた投げ、腕ひしぎ十字固め、飛びつきヘッドシザース・ドロップからのネック・ロックと徐々に猪木の攻勢が目立つようになってくる。長州も巻き返してデスロックとキャメル・クラッチの複合技で猪木を締め上げる。この時の猪木の動きに注目して欲しい。固められているものの両脚を動かし、さらに腰も左右上下に揺らしながら、少しずつだが長州のバランスを崩している。地味なムーヴだが、この積み重ねによって猪木はロープに近づきながら、この複合技を解除することに成功する。こうした対処は教えてもらうようなものではなく、実戦経験から会得した技術である。長州が仕返し



の腕ひしぎに入ると難なく態勢を切り返して身体の硬い長州を複合ストレッチ技で苦しめていく。こ

こまでの展開から、まるで離れていく弟子に対する公開のスパーリングのような印象を受けるのだがうがった見方であろうか？両者の足が絡み合い、再度の膠着状態でレフリーのブレイクがあったところ、長州が一気にサソリ固めの態勢に入る。しかし猪木の意識もしっかりしているので容易にサソリ固めを決めさせない。この攻防がしばらく続く。先に見せた腕をねじ込んでの防御で技を決めさせない猪木に対し、リング中央に引きずっていきながら、長州は腕を取られないように猪木の足のホールドの仕方を変えていく。ほぼ中央に位置すると、長州は全体重を猪木の身体にかけていく。通常よりもからり重心を低くして呼吸もしづらく





しているようだ。依然として抵抗する猪木のガードに対し、長州はストレッチを加えて別技に移行すると見せかけ、隙が生じた瞬間にステップ・オーバーに



成功した。地味ながら手に汗握る攻防である。長州は右手でクロスした猪木の両脚をホールドし、左手を猪木の右膝にあてて絞り上げている。



身体の柔らかい猪木であるからこそ堪えているが、通常（もしくは硬い）の選手だとギブ・アップする他に逃げる術は無い。だが猪木は脱力して堪える。長州はさらに左手の位置を変えて絞り込みの力点を変更する。すると猪木は呼吸を整えて一気に腕立てをして長州の重心を上げさせ、自身の身体を捻りサソリ地獄から脱出してみせた。まさに驚愕の場面である。技をかけ続けていると、どうしても疲労感が出てきてホールドしている力が弱まってくる。また、技をかけられている方もその状態に慣れてくる（但し痛みが軽減・無くなるということではない）。

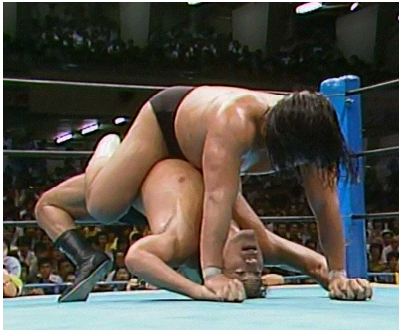




写真で猪木がサソリ固めから脱出する過程を大まかに載せてみた。倒された長州は足をクロスした形でのアキレス腱固めで猪木を痛め付け続けるが、サソリ固めの激痛・苦痛に比べれば、だいぶ凌ぎやすい態勢になっている。ロープ・ブレイクの後、ちょっとした間だがエプロンで猪木がインターバルをとるが、長州が強引にリング内に引き込みロープにとばしてのリキ・ラリアート。もんどり打って倒れた猪木を再度サソリ固めで追い込む。ステ



ップ・オーバーするまでのスピードが速く、またサソリ固めの形ができあがってから直ぐに両手でロックをガッチリと固めている。明らかに早期ギブ・アップを狙っている。位置もロープから適度に離れており、絶好の状態だ。別角度からの写真でも猪木の両脚が隙間無く固められていることが判る。・・・だが猪木はマットに立てた腕をわずかに動かしながら匍匐前進の要領で少しずつ前進、これで体勢が固まっている長州のバランスが崩れる。おそらく理屈での説明はできないだろうが、感覚的に力学の向きを体感して「力の向きのバランス」を崩すことで技が解けることを知っているのだろう。これが「レスラー（格闘家）のセンス」なのだ。このセンスを体現できるレスラーはなかなか居ない。自信をもってギブ・アップを狙っていた長州は心理的に動揺する。苛立ちながらストンピングと張り手を繰り返すが、これは猪木の得意パターンの一つ。厳密には反則なのだがナックル・パート（顎へのストレート・パンチ）で長州の突進力を殺ぐ。これで試合の流れ自体が途切れ、猪木は冷静に展開を挽回できた。ここで長州はパワーで押し切れれば勝利の可能性もあ



ったのだが、猪木のブリッジに自身の体重を乗せるなどグラウンド攻防に引きずり込まれていく。意地でブリッジを崩すため、体重を乗せようとしたところをボディ・シザースで捕獲される。そ

こからマットに転がされ、もはや技の名称など無いグラウンドのフルネルソンにボディ・シザースで長州のスタミナを奪いにかかる。ロープ・ブレイクで両者が立ち上がり回転しながら対峙する場面になるが、あれだけサソリ固めで追い込ん



だことが「無」にされているように猪木が活力に満ち、長州の疲労が見て取れる。それでもアマレスの猛者だった片鱗を見せる長州の攻めをやんわりと受け流しながらグラウンドに付き合う猪木。これで長州が長丁場に備えてじっくりとレスリングで攻め直そうとした矢先、猪木が唐突のジャーマン・スープレックス・ホールド。スピード・角度ではなく突発的な攻撃で、長州はダメージを負う。長州の「しまったっ」という表情が印象的だ。カウント 3 が入っていないことを確認した長州は感情的報復の垂直落下式バック・ドロップで猪木をマットに叩き付ける。バック・ドロ

ップ自体はスピード、角度、捻り、いずれをとってもパーフェクトである。叩き付けられた猪木の身体がバウンドしているほどの威力だ。フォールを返された長州は今一度バック・ドロップの体勢に入るが猪木は警戒してロープに逃

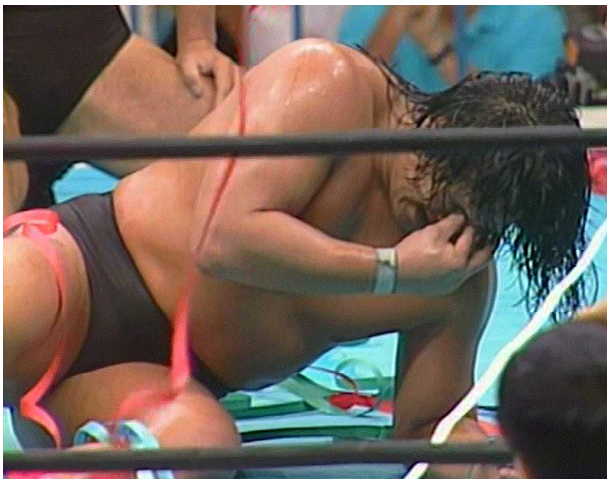


れる。ブレイクして、再三再四のリング上の睨み合い。これまでの長州の攻勢がまたしても「無」にされる。組むと猪木はネック・ロックで長州の動きを封じ込める。ここでもグラウンドの攻防になるが、猪木の延髄斬りが長州の脳天を掠めると、長州は一気にパワー全開のファイトに切り換え、対角線を走り込むアバラッシュ・ホールドで猪木を叩き付ける。だが猪木は直後にブレーン・バスター返して長州を場外に投げ落とし、また長州の流

れが寸断される。猪木のアルゼンチン・バックブリーカー、猪木のリバース・スープレックスをブリッジで返してから長州のカナディアンバックブリーカなど力技の応酬があったがこれがフィニッシュになるようなものではない。猪木のドロップ・キックが長州をとらえ、もう一発を出そうとすると長州がこれをかわし、ロープに走ってからのリキ・ラリアート。だが直前に猪木が顔を背けて長州の右腕は猪木の左腕にあたり、ラリアートの威力が大きく無効化してしまう。長州自身も判っていたようで、猪木をロープに振ってのラリアートを狙う。1 発目のダメージを最小限にしていた猪木は、長州の攻



撃パターンを冷静に予測し、2 発目のリキ・ラリアートを身をかがめてかわし、長州の背後にまわってからコブラ・ツイストの要領で後方に倒れ込み、そのままグラウンド・コブ



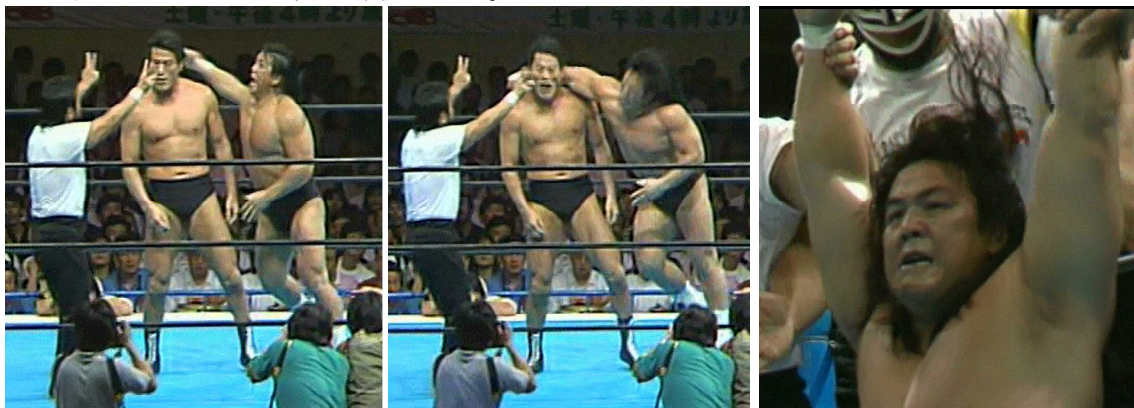
ラでカウント 3 をとった。パワーという意味ではなく、長州の攻撃を凌ぎきって完勝する猪木の強さ（古舘伊知郎曰く「風車の理論」）が遺憾なく発揮された試合である。カウント 3 が入ったあとの長州の表情が「完敗」を物語っている。長州は「師匠・猪木に勝てなかった」まま、新天地・全日本プロレスへと戦場を移すことになる。この時、長州は今後二度と猪木と闘うことは無いと思っていた（はず）。

② 1988 年 7 月 22 日 北海道・札幌中島体育センター

(I W G P へビー級王座挑戦者決定リーグ戦)

アントニオ猪木 VS 長州力 (*試合終盤のみの観戦)

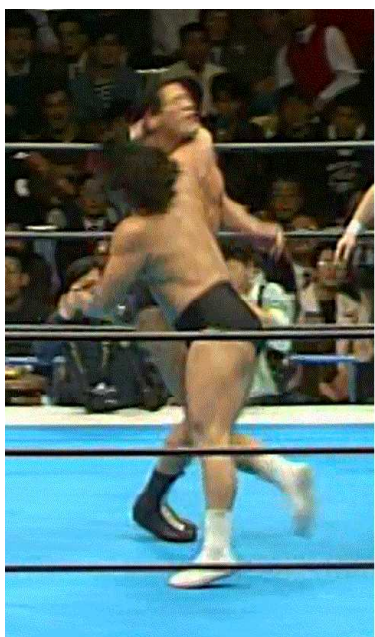
1987 年春、全日本プロレスから古巣・新日本プロレスに長州が復帰した。同じく新日本復帰を果たしていた U.W.F. 勢もあり、当時の新日本マットは新日正規軍・ジャパン・プロレス軍・UWF 軍の大所帯(選手飽和状態)であった。その中でリング上の主導権争いが激しくなっていた頃の対戦である。



終盤、猪木が長州をジャーマンで投げきるも、ブリッジが崩れて 2 カウント止まりだった。すると猪木がレフリーのミスター高橋に執拗な抗議をする。そこに背後から長州がリキ・ラリアートをくらわせ、猪木から初めてのカウント 3 奪取。長州がとても嬉しそうに両手を突き上げるが、「猪木に勝利した」ことよりも群雄割拠の新日本マットの中心に立てたことを誇示する意味合いが強かったようだ。

③ 1989 年 2 月 22 日 東京・両国国技館

アントニオ猪木 VS 長州力



ソ連のレスラー来襲が話題となっていた時期、「これぞプロレス」を世に示すために組まれた対戦である。既に長州は新日本プロレスの現場監督としてマッチ・メイクと選手管理の権限を有した存在となっていた。前年のアクシデント的なフォール勝ちではなく、円勝利を長州自身は意識し、そして観客も期待していた。



結果は長州貫禄の完勝、敗北した猪木は人目を憚らず号泣。猪木が



「初めて日本人レスラーに力でねじ伏せられた」試合であった。

④ 1985 年 9 月 19 日 東京・東京体育館

アントニオ猪木 VS 藤波辰巳

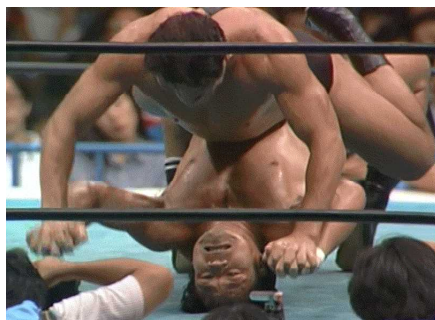
前田日明ら U.W.F.勢に続き、長州力らジャパン勢の相次ぐ離脱により、新日本プロレスは存続の危機に直面していた。猪木は全日本プロレスから引き抜いたブルーザー・ブロディとのシングル・マッチを乱発したり、アンドレ・ザ・ジャイアントにマスクを被せ「ジャイアント・マシーン」として参戦させるなど、話題作りに奔走したが、観客動員・会社経営に苦戦していた。この団体存亡の時、真面目な藤波辰巳が師匠・猪木との対戦を要望し、これぞ「新日本プロレス・ストロング・スタイル」が健在であることを示めそうとした。新日本プロレスもこの対戦には力を注ぎ、「鉄人」ルー・テーズを特別レフリーに迎え、藤波が勝利した場合には「世界ヘビー級ベルト」を授与するというオマケまで付けた。



新入場テーマ曲「マッちょ・ドラゴン」（歌なし）で先に入場した藤波が、ロープを上げて猪木をリング上に誘う。欲望・陰謀渦巻く過激な新日本マットにおいて、こうした藤波の純粋な考えとスタイルは時として弱く見えるものの、団体の命運を賭けた試合（興行）であったこの試合ではとても凛々しく逞しい姿に見える。そして「新日本プロレスを消してなるかつ」と熱烈に新日本を応援する観客が旧・東京体

育館に集まった。舞台は整っており、あとは藤波が悲願の初勝利をあげることを期待する観客と『落日の闘魂』を見たくない観客がリング上に釘付けにされていく。テーズにうながされての両者の握手、藤波の猪木に対する敬意が滲み出ている清々しい象徴的なシーンである。

試合展開は勿論「ストロング・スタイル」。黒のショート・タイツとリング・シューズを着用しサポーターやテーピングをしないで、関節



技・絞め技・固め技で体力と精神力を激しく削り合う闘い模様である。派手さは無いが、圧倒的な説得力を持つ試合だ。ブリッジの攻防で、



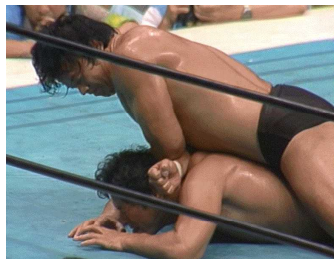
藤波が首ひとつで猪木の体重を支える場面は、日本プロレスから連綿と受け継がれていく道場でのシゴキの賜物である。猪木が重心を落として逆エビ固め、藤波は腕を立てて返



そうとする。すると猪木は抱えていた藤波の両脚をおろしあっという間にインディア・デスロックで締め上げる。しばらくデスロックで足を攻め、今度は普段見せることの無い「鎌固め」を繰り出す。猪木のブリッジが美しい。小技も含め、こうした流麗な技の変化はさすが猪木といったところ。

藤波もスタンディング状態で猪木の顔面に

張り手をくらわして自身を鼓舞すると共に、グラウンドでも攻勢を仕掛ける。バックにまわって足を絡めて猪木の下半身を固め、最初は右腕を肘を当てながらとろうとするも抵抗されたため、腕を交差させて猪木の首を押さえ込み、ガードが甘くなったところで左腕にアーム・ロックを仕掛けていく。猪木・藤波共に一点集中もしくは流暢に変幻自在の技を繰り出している。まるで道場



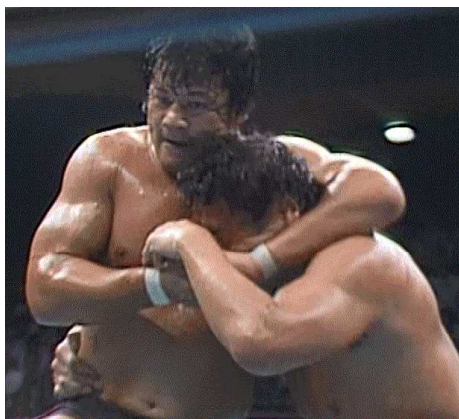
における激しいスパーリングを見せられているようだ。あと藤波の技のひとつひとつの丁寧さに注目してみよう。



足首のホールドは顎と

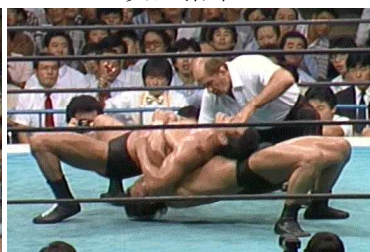


腕全体で固め、フェース・ロックも捻り切るよう



にまわしながら絞め、グラウンドのヘッド・ロックも万力の如く絞め上げて、猪木が苦しむには充分な程に上体が反り上がっている。猪木が立ち技に移行しようと起き上がるも、藤波のヘッド・ロックは全く緩むことはない。藤波の前腕部が猪木の左頬骨に食い込んでいる（藤波の大胸筋とに挟まれている）。猪木がバック・ドロップで投げようとしても足をかけて防御し、それでもヘッド・ロックの絞めは続いている。

次は猪木がカール・ゴッチ戦やアンドレ・ザ・ジャイアント戦でも見せたリバース・スープレックス。ライバルの長州も猪木をブ



リッジで持ち上げたが、藤波も負けてはいられない。注視すると、藤波は両足を

全く動かさずに背筋・腹筋+大腿筋で猪木の体重をブリッジの体勢で持ち上げている。大腿筋が小刻みに震えていることを見逃さないでもらいたい。この展開が2回ある。レスラーの体力の衰えをうかがい知ることができる事例だ。



藤波がブリッジ起伏から逆



さ押さえ込みを見せるが、猪木はこれを返すと直ちに藤波の腕をとる。すると足を藤波の首に絡め、グラウンド式のサーフボード・ストレッチ、藤波が体を起こしたところ足を交差させて左腕を裏十字固めでとらえる。全て「一歩先手を取られている」ことに苛立った藤波が拳を握り、テーズに制止される。冷静沈着かつ純粋な気持ちでいた藤波を感情的にさせるのも猪木のインサイド・ワークのなせる業である。

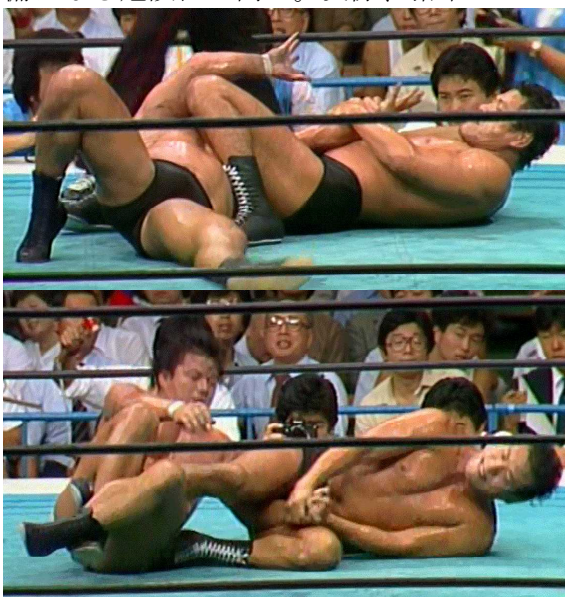
次は藤波が低姿勢でタックルに入ったといころ、猪木が不用意にキックを出した。その蹴り足をキャッチした藤波は先ず片逆エビ固めで猪木の動きを止めようとする。藤波が基本に忠実に絞め上げると猪木が「???コノヤロー」と挑発する。藤波は背中に蹴りを1発入れながらも膝を腰に立ててステップ・オーバーの機会をうかがう。力尽くで技を掛けようすると相手の抵抗力などで自分もスタミナをロスすることになる。藤波は相手の体勢と呼吸などを観察しながらタイミングを見計らってハーフ・ボストン・クラブを決め



た。中継スタッフのマイクが猪木の「絞めろ、絞めろ」の声をひろっている。技を掛けている藤波を挑発する要素もあるだろうが、自身を鼓舞する意味合いもあるらしい。ロープに逃げられそうになると藤波は技を解いて猪木を中央に引きずり弓矢固めを仕掛けようとするが猪木の防御と汗で滑りやすく断念、すぐさま猪木の得意技リバース・インディアン・デスロックを見せる。これは挑発を込めた攻撃だ。猪木のように反動をつけるのではなく、両手を添えてしっかり固めるデスロックだ。同じ技を出すにしても真似にならぬよう意地を見せている。足のホールドを強化



して、先ほど諦めたボー&アロー（弓矢固め）を成功させた。しかしこの技は長時間掛けるには自分にも負担がかかる他、ロックが外れると無防備になる危険性が高い。実際、猪木



が首のロックを外し身体を反転させながら藤波の左腕を掴んであつという間に腕ひしぎ逆十字固めを決める。十字固めが長くなるとダメージも色濃くなってしまうので、藤波は猪木の足を両脚で挟み込み、十字固めの体勢を崩すことに成功した。この時代はメイン級の試合で関節技が決まり手になることはほとんど無かったのである。猪木はテーズに膠着状態をアピールしブレイクさせた。このあと藤波が猪木の腕狙いで技を出していくが、汗で滑るのと猪木の防御が巧妙なのでなかなか技が決まらない。切り返した猪木に喉元・鳩尾（ともに急所）



へ肘を押し付けられ苦しめられてしまう。このあともねちっこい攻防が続く。

中盤、ロープ・ワークがやっと見られる。猪木が返ってきたところをカウンターのドロップ・キックで迎撃、近寄った藤波に猪木が下から蹴りを見舞う。警戒した藤波がここで猪木にサソリ固めを繰り返す。藤波は右手で両脚を固定してからステップ・オーバーする



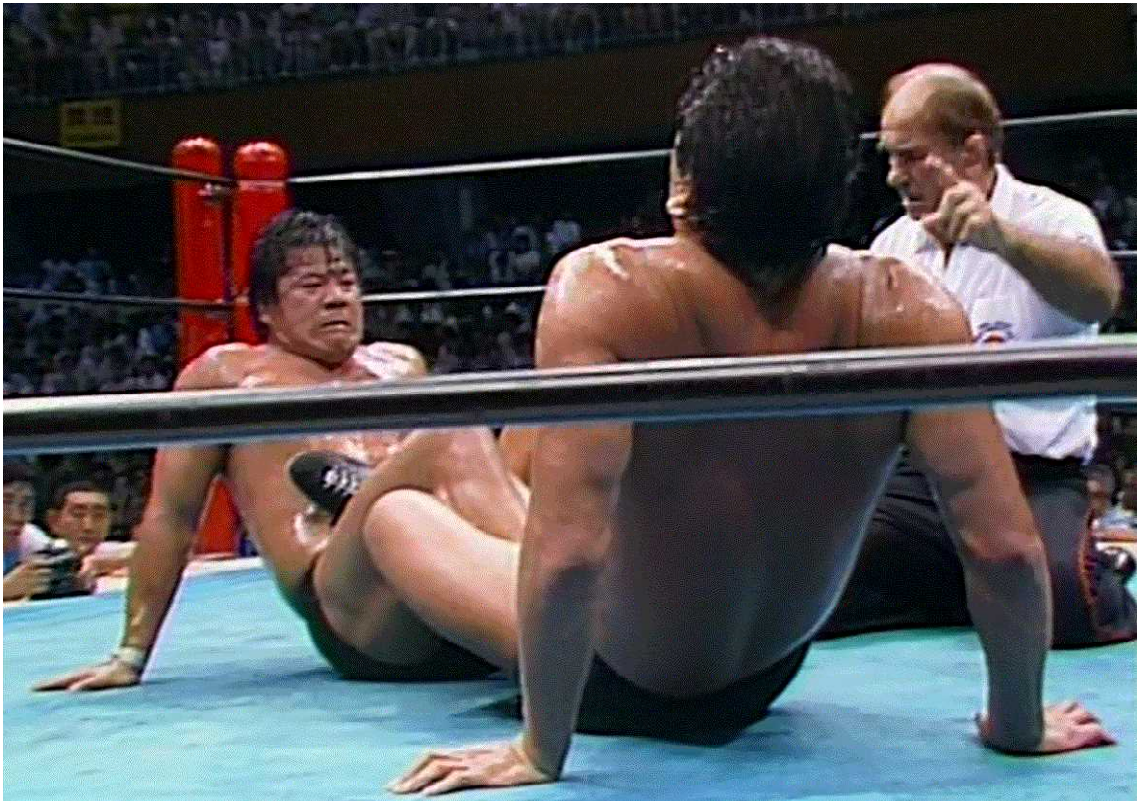
ので梃子の原理で比較的容易に技が完成する。長州のサソリ固めを耐えきった猪木、またライバル長州の技ということもあり藤波は技を解き、今度は足四の字固めに移行する。逆エビ→デスロック→サソリ→足四の字と下半

身への理論的な集中攻撃で、さすがの猪木も苦悶の表情を浮かべる。それでも猪木は「絞





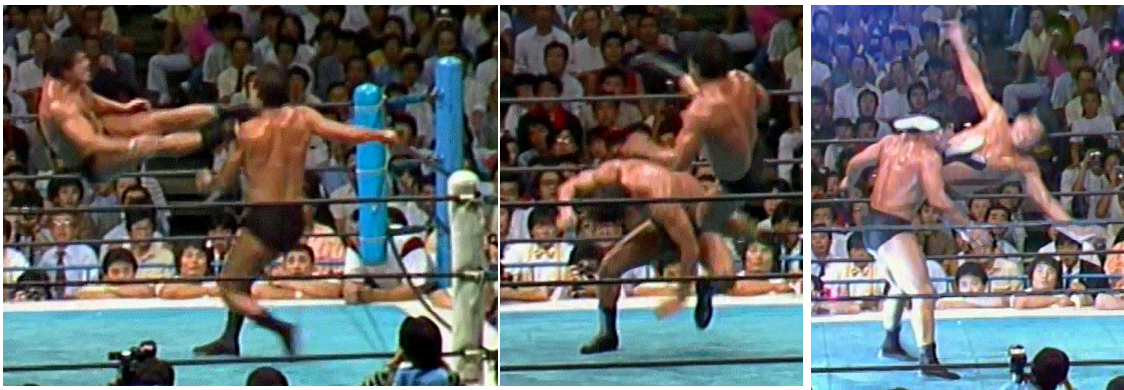
めろ、絞めろ、コノヤロー」と藤波を挑発し、勿論藤波は売り言葉に買い言葉的に絞め付けを強める。だが驚くことに、猪木は自身の左膝を支点に身体を反転させ足四の字固めを返してしまう。藤波も意地で四の字の体勢に戻す。この攻防が複数回、繰り返される。



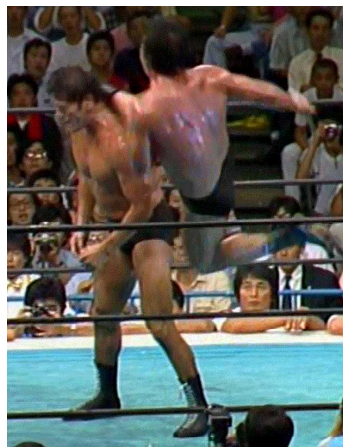
藤波が「折るぞっ」と叫びながら絞めても、猪木は苦しみながらも「絞めろっ」「折れっ」と連呼し、顔を歪めながら耐えきってしまう。藤波の複雑な表情が、心の動揺を物語っている。この試合での藤波の足四の字固めの極まり具合は「完璧」。次の写真・中央に見える藤波のリングシューズの底を見れば、100点満点の絞め具合であることが判る。猪木の表情も徐々に生気が薄まっていくようだし、身体も自由がきかなくなっているのが見て取れる。それでも弱々しいながらも自分の足を指差しながら藤波に「折れっ」と発言する。これに応えるように藤波が「折るぞっ」とかテーズに「ギブ・アップ？」と発言するたびに、猪木が苦痛に悶えながらも体勢をひっくり返したりロープに近づこうとする。そして



最終的にロープ・ブレイクで逃げられてしまう。猪木はリング下でインターバルをとるが、ダメージの軽減にはならない。リングに戻れば、藤波がまた足攻撃を仕掛けてくる。掟破りのアリ・キックがクリーン・ヒットしてダウンした猪木の足を取り、今度はサソリ固め・・・しかし猪木の防御によりまたしても足四の字固めへ移行する。だが先ほど見られたような四の字地獄にならぬよう藤波の左脚を手で押さえ、早めにロープ・ブレイクをして難を逃れた。ここで藤波は攻撃方針を転換、ロープに振ってカウンターのドロップ・キックを決める。猪木の顎・首をとらえ、ダメージ色濃しと判断した藤波は猪木に延髄斬りを

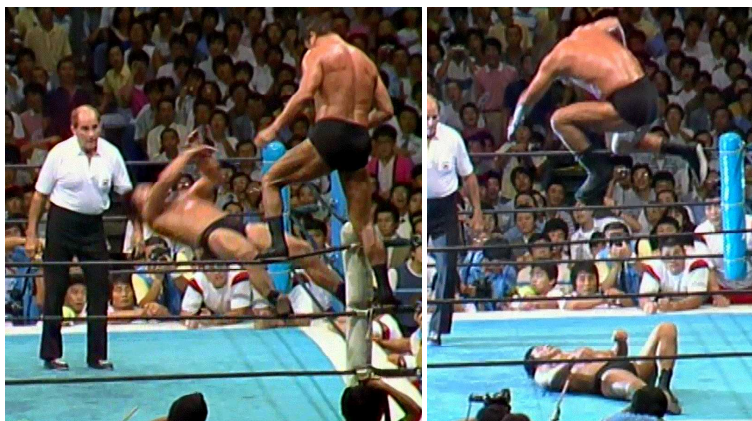


見舞おうとする。当然だが猪木は冷静に身を屈めてかわし、返す刀で延髄斬り。ダウンした藤波を腕ひしぎにとらえるがしばらくしてロープ・ブレイク。エプロンの藤波を猪木が



ブレーン・バスターでリング内に入れようとするも着地した藤波はロープ・ワークで猪木にラリアート、そして引き起こして不格好なジャンピングしてのハイ・キック（延髄斬り）。そしてバックに回ってジャーマンを出そうとしたところ、猪木がバックに回り込んで反動を使ったジャーマン

・スープレックス。返された猪木は藤波をボディ・スラムで叩き付け、コーナー・ポストにのぼる。雪崩式を狙った藤波がボディにパンチを入れて駆け上がろうとしたが、猪木はこれをナックル・パートで迎撃、さらにニー・ドロップで追撃。猪木は藤波を引き起こして



ブレーン・バスター・・・だが藤波は空中で切り返して猪木のバックにまわり、ジュニア時代の必殺技ドラゴン・スープレックスを炸裂。藤波のブリッジも高角度、スピードも申



し分なかったが、久しぶりの大技であったことから藤波の脳天着地が崩れてしまい、そのままホールドも横に流れて、フルネルソンのグリップも外れてしまった。藤波は最大のチャンスを逸してしまった。ロープに振



られた猪木は、待ち受ける藤波に鉄拳制裁からの円固め。腰高であったため、藤波は猪木を投げきって脱出できた。猪木はロー・キックを入れ、今一度円固めへ。藤波は根性でロープ・ブレイク。猪木は藤波をリング中央寄りに立たせて再三の円固め。これで藤波の動きがピタッと止まり、テーズが反応しない藤波を見てレフリー・ストップを宣告。藤波はファイト続行のジェスチャ、一部観客からも延長コールが寄せられるが、裁定は覆らない。藤波は健闘したが、偉大な師匠の壁は厚かった。ほぼ 100 %クリーン・ファイトの攻防



は観客のみならず、「金狼」として悪名を轟かせた上田馬之助をも感化させ藤波、次いで猪木との握手と健闘を称える仕草を見せた。昔からプロレスを観戦していれば、これは衝撃場面である。



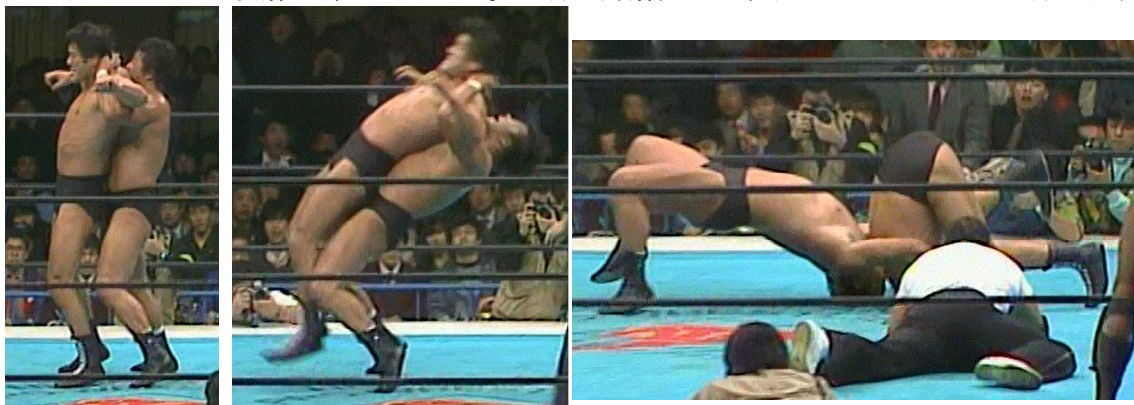
選手は大量離脱したが、このような神々しい試合をされては新日本プロレスを応援しない訳にはいかない。多くの観客・ファンが感動した師弟対決だった。ちなみにこの大量離脱があったからこそ闘魂三銃士らのデビューが早まることになる。

⑤ 1985 年 12 月 12 日 宮城・宮城県スポーツセンター

(IWGP タッグリーグ優勝戦)

アントニオ猪木／坂口征二 VS 藤波辰巳／木村健吾

この直前の両国大会で U.W.F. 勢 (前田日明・藤原喜明・木戸修・高田伸彦・山崎一夫) の新日本復帰 (業務提携) が発表され、翌年からの対抗戦へ期待が否が応でも盛り上がっていた。そこで藤波・木村のニューリーダー・コンビが師匠の猪木・坂口を下し是が非でもタッグリーグで優勝を飾りたかった。試合は好勝負だが、何といてもこの試合の白眉



は藤波が猪木から初フォールを奪ったところにある。フルネルソンで投げるところまでは良いのだが、着地の際に藤波の顔の上に猪木の背が乗ってしまい、どうしても両手のグリップが外れてしまう。だが今回は意地でも手は猪木の肩を押さえていた。ミスター高橋のカウントが微妙だったのは猪木も指摘していたことだが、猪木曰く「アイツ (藤波) の嬉しそうな顔をみたら文句を言えなくなってしまった」。この後の勝利者インタビューで藤波「ヤッター」、木村「ヤッター」という、後世長く笑い続けられるであろう発言がある。しかし、この年の藤波の頑張りや猪木戦、タッグとはいえ猪木からフォール勝ちを踏まえれば、その栄誉は称えられるべきものである。

⑥ 1988 年 8 月 8 日 神奈川・横浜文化体育館

(IWGP ヘビー級選手権)

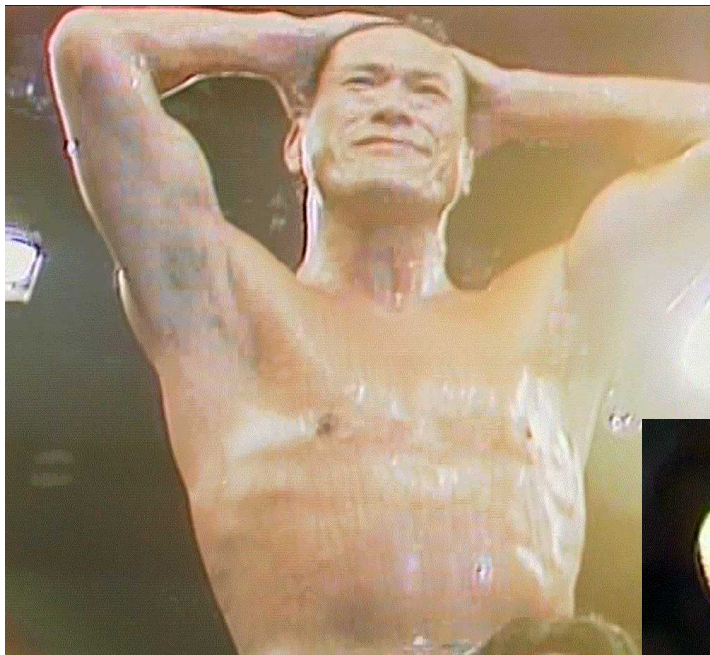
藤波辰巳 VS アントニオ猪木 (*試合終盤のみ観戦)

「飛龍革命」後、初のシングル・マッチ。しかもこれまでとは状況が真逆で、王者が藤波、挑戦者が猪木という状況での対戦。フル・タイムのドロー、藤波の王座防衛となった試合である。飛龍革命により、猪木に代わる新日本プロレスのメイン・イベントとしての地位を築き上げていた藤波は、猪木からベルトを渡される際にも視線は合わせなかったが、腰にベルトをあてがわれた時に涙が込み上げてきている。猪木の目にも涙が浮かんでいる。すると長州が猪





木を肩車して、その健闘を称える。藤波を掲げたのは越中詩郎だ。猪木と藤波は共に涙を流しながら互いを讃えた。観客からの猪木コールを浴び、猪木が泣いている。藤波はこの試合で猪木に勝利することが出来なかったものの、飛龍革命のひとつの結果として猪木の挑戦を退けたこと、そしてその猪木から王者として認められたこと、そして観客からの温かい声援に応



えるようにIWGPヘビーのベルトを高く掲げた。沖縄で師匠に反抗してからの2ヵ月超、ビッグ・バン・ベイダーといった巨体の難敵を小さい身体で凌いだ藤波にとって、忘れられない瞬間が、まさにこのベルトを手にした時であった。

